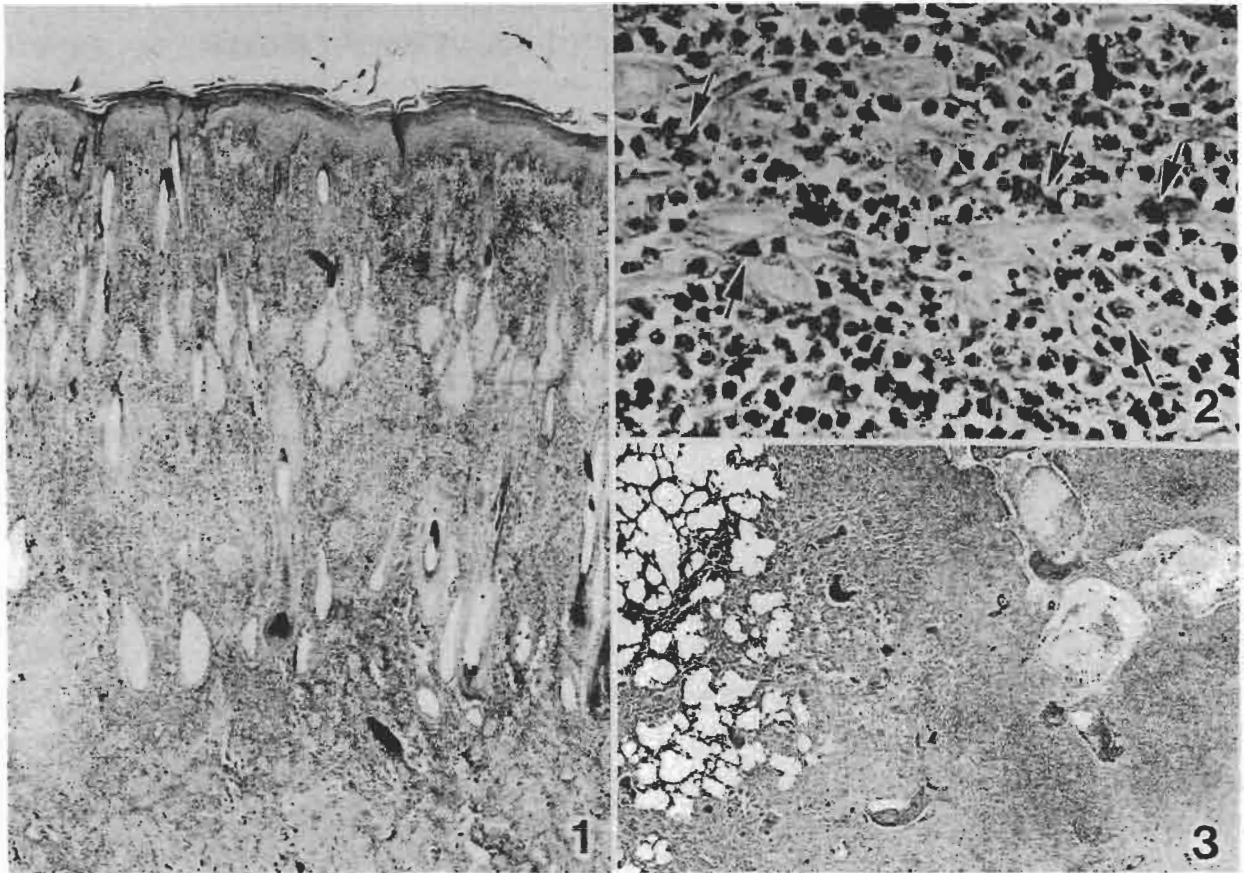


牛の瀰漫性好酸球性皮膚炎

岩手大学農学部家畜病理学教室出題 第30回獣医病理学研修会標本No.524



動物：牛，黒毛和種，雌，1歳2ヵ月齢。

臨床事項：1989年3月21日，元氣食欲無く，初診。貧血削瘦を認めた。3月28日，皮膚病変が発見され，4月4日，皮膚型ウシ白血病疑診により大学へ搬入。ほぼ全身の皮膚において脱毛・出血を伴う小指頭面大から手拳面大の扁平な散発性結節性ないし瀰漫性膨隆巣を認めた。4月6日，剖検。

血液検査所見：4月4日，WBC13,300/mm³，白血球百分比(Ly46.0, Bd3.0, Seg46.5, Eos2.0, 異形細胞2.5%)，RBC687×10⁴/mm³，赤血球大小不同(+)，BLV抗体(-)。

剖検所見：1)放血殺。2)尾根部から股間部，下顎部，頸部をはじめとする全身皮膚各所における部分的脱毛，出血及び割面上，真皮層の黄色調肥厚を伴う膨隆巣。3)右浅頸，右腸骨下リンパ節をはじめとする全身各所リンパ節の軽度腫大。4)右肺前葉，中葉，左肺前葉における浮腫性線維化巣及び両肺後葉における肺気腫。

病理組織学的所見：提出した頸部の皮膚(Fig. 1; HE染色，×25)では，1)表皮における角化亢進に伴う角質層ならびに有棘層の肥厚，2)毛包における角化亢進，拡張，一部栓子形成，脱毛，崩壊及び休止期の毛包多数，3)真皮層における脱顆粒を伴う高度の瀰漫性好酸球浸潤，

巣状組織球集積散発。一部に石灰沈着を伴う限局性微小壊死巣，線維化，脈管周囲の好酸球浸潤ならびに肥満細胞の中等度浸潤(Fig. 2; Giemsa染色，×350，↑:肥満細胞)。軽度動脈内膜炎，4)毛包虫少数寄生，などが認められた。

また，気管支周囲性ならびに肺胞壁の線維性肥厚ならびに浮腫，好酸球，マクロファージの浸潤，肺胞内への線維素の滲出，細動脈線維素血栓，細動脈周囲の浮腫(Fig. 3; Giemsa染色，×23)がみられた。

考察：脱毛，皮膚の肥厚，好酸球の浸潤，脈管周囲の細胞浸潤，毛包周囲の炎症及び肺にみられた病変は，本例がアレルギー性のものであることを示唆しているように思われた。アレルギーについては，同定することができなかったが，外因性アレルギー性肺炎と同様の肺所見も高い。その他，犬猫の好酸球性肉芽腫のひとつであるliner granuloma，馬の好酸性肉芽腫といわれているnodular collagenolytic granuloma，毛包虫症，内分泌性の皮膚炎，肥満細胞腫なども検討されたが，いずれも否定された。

病理組織学的診断：牛の瀰漫性好酸球性皮膚炎。